

内藤湖南の金石学史研究

石 永 峰

Naitō Konan's study on the History of Epigraphy

SHI Yongfeng

Naitō Konan (1866-1934) was an Oriental historian and Sinologist, who was representative in Japan from the Meiji era to the early Shōwa era. Depending on *Seigaku tōzen* (西学東漸), that Japanese accepted Western science and culture aggressively at that time, Konan regarded the importance of the study of Chinese history and *Kaozheng* (考証). He especially succeeded the research methods of China's Qian Jia School (乾嘉学派), and founded the Kyoto School of Sinology with Kuwabara Jitsuzō and Kano Naoki. Different from the Tokyo School of Historiography, they emphasized a unique historical research and system which depended on *Kaozheng*, and therefore trained many of researchers. Notwithstanding Konan produced important influence concerning the Cultural history of Chinese, the relative research of his study on the History of Epigraphy has not yet progressed competitively. This article purposes to investigate the transition and expansion of Konan's study on the History of Epigraphy by using the text such as *Enzan-sosui* (燕山楚水) *Sinchō-shi tsūron* (清朝史通論), and *Sina shigaku-shi* (支那史学史).

Keywords: Naitō Konan, The Study on History of Epigraphy, *Kaozheng*, Chinese Calligraphy

キーワード：内藤湖南、金石学史研究、考証学、書法

はじめに

内藤湖南（1866～1934）は明治から昭和初期にかけて近代日本を代表する東洋史学家であり、漢学家でもある。当時、西学東漸、西洋の科学文化を積極的に受容するという日本近代の歴史背景の中で、湖南は中国史の研究を重視し、清代の考拠学、とりわけ乾嘉学派の研究方法を引き継ぎ、桑原隲藏、狩野直喜とともに京都東洋学派を創設した¹⁾。彼らは東京文献学派と対照的に考証学という独創的な史学研究

1) 三田村泰助は「京大の東洋学に冠せられたこの名称（筆者注：京都学派）は私の記憶違いかもしれないが、たぶん郭沫若氏あたりが言い出したのではないかと思う」と記述している。三田村泰助『内藤湖南』、中央公論社、1972年、

及び体系を確立し、多くの研究者を育成した。湖南は中国文化史に関する研究業績を多く残しているが、管見の及ぶ限りでは、彼の金石学及び金石学史に関する先行研究はまだ皆無である。本文は『燕山楚水』『清朝史通論』『支那史学史』などの文献を利用し、湖南の金石学に関する研究視野の変遷と拡大について考察する。また湖南の金石学史研究において後世に与えた影響にも触れたい。

一 「書法と金石」比較方法論の形成

関西大学内藤文庫は中国の金石学に関連する書籍と拓本資料を多く収蔵していることから、湖南が当時の中国における金石学の研究動向にも注意していたことが窺える。本節は湖南の金石と書法に関する早期の論述を分析し、この方面における彼の認識と研究状況について考察する。

まず、記者時代の湖南の金石と書法に関する論述を見てみよう。湖南の生涯は大きく「学生時代」「記者時代」「京都帝国大学教授時代」「隱棲時代」に区分することができる。湖南は家学を引き継ぎ、子供の頃から中国の歴史や文化について学んでいた。「記者時代」は明治20年（1887）湖南が22歳の時に上京して『明教新聞』の記者になってから、明治40年（1907）42歳の時京都帝国大学東洋史学講座の講師になるまでの二十年間を指す。実は湖南が上京する前に、北秋田郡綴子小学校の訓導となり、約二年間校長を務めていた。湖南は初回訪中に旅行記『燕山楚水』を出版し、その中で「書法と金石」と題する一節を設けている。湖南は読書と通して「自顔柳氏没、筆法衰絶」²⁾、すなわち顔真卿、柳公権の没後、中国の伝統的な筆法が失われたことを指摘した。また、中国の文人学者と交流した際に、嚴復（1853～1921）、羅振玉（1866～1940）に正倉院に伝承されてきた雀頭筆の模造品を示して試筆させた所、使い慣れないので書きにくいことから、中国で運筆の正伝が失われたと記録した。湖南は、この体験を通して、どのような方法で伝統の古法を復興できるかということについて次のように論じた。

かの六朝風を浮慕するの徒、亦徒らに碑本の形似に屑々として、刻画太だ過ぎ、曾て其神を我邦に存する真跡に求め、其法を我邦に傳ふる入木道に求むることを知らず、古法の果して復すべからざるか、抑も求むる者其の正鵠を得ざる耳。篤学の人須らく先づ我が入木道より入り、其法によりて上は因果經以下、寧楽の諸經卷、魚養、空海、逸勢、前後、かの隋唐と筆跡差別あらざる時代の字様に習熟し、其の得る所によりて、上は法隆寺釈迦藥師像背銘より、以て下は南円堂銅灯台銘、神護寺鐘銘等あらゆる金石文字を玩味せば、真跡と金石との間に生ずる関係自からにして融会すべく、而して我が金石と殆ど差別なき同時支那金石文字の遺格、勞せずして手に応ずるに至るべく、晋唐の逸趣、庶幾くは今日に興すべし。(略)³⁾

208頁。

2) 蘇軾『東坡題跋』、中華書局、1985年、82頁。

3) 内藤湖南「書法と金石」、『燕山楚水』博文館、1900年、『内藤湖南全集』第2巻所収、筑摩書房、1971年、124～125頁。

湖南はまず伝統の古法は復興できるのであろうか、ただ人々はその正しい学び方を知らないだけであると指摘する。中国古代の筆法は日本に伝来し、「入木道」として日本の代々の書家によって引き継がれてきた。それ故、日本に伝存する同時代の墨跡と金石文字は中国のそれと非常に近いと力説した。研究方法として、湖南は日本に伝存する古来の墨跡と金石文字を調べて、一つに集めてよく比較すれば墨跡と金石文字の繋がりや異同を自然に理解できるようになると提起した。

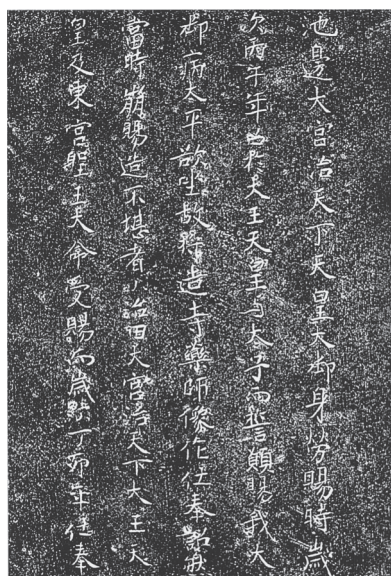


図1 法隆寺釈迦薬師像背銘

このような論説は、訪中の際中国の文文学者との交流を通じた知見上の収穫に基づくと言えよう。湖南は羅振玉とお互いに自著や金石拓本を贈答しあい、それに対する見解や意見交換しあっていた。例えば、羅振玉は自分の著作『面城精舍雜文甲乙篇』、『読碑小箋』、『存拙齋札疏』、『眼学偶得』と、拓本「秦瓦量」、「漢戴母墓画像」、「漢周公輔成王画像」、「北齊張氏白玉象」、「唐張希古墓誌」、「高延福墓誌」、「南漢馬氏買地券」、「晋永康甌」、「無年號甌」、「宋元嘉甌」を湖南に贈った。これに対して、湖南は自著『近世文学史論』、そして拓本「延曆勅定印ある右軍草書」、「法隆寺金堂釈迦佛」、「薬師佛光焰背銘」、「二天造像記」、「薬師寺塔檨銘」、「佛足石讚碑」、「神護寺鐘銘」などの拓本と、「風信状」、「小野道風国字帖」などを贈り、「蓋し此等諸本は、文字尽く精善なるに非ざるも、皆人家に蔵弃して、市肆間の購求すべき者に非ず」⁴⁾と書き加えた。

ちなみに、湖南は「書法と金石」の金石に関する論述の中で言及した「法隆寺釈迦薬師像背銘」、「神護寺鐘銘」、「薬師寺塔檨銘」を羅振玉に贈り、意見を交換したようである。その比較研究の方法は、当時の湖南が金石と書法を研究する際に使っただけでなく、晩年まで同じような研究方法を用いていた。湖南は昭和7年（1932）に平安書道会で「書論の変遷について」⁵⁾と題する講演を行い、その中でも多く

4) 内藤湖南「書法と金石」、『燕山楚水』博文館、1900年、『内藤湖南全集』第2巻、筑摩書房、1971年、106頁。

5) 内藤湖南「書論の変遷について」、昭和7年講演、昭和23年1月および4月発行「東光」第3号第4号所載、『内藤

の金石と書法の資料を活用し、比較しているのである。

湖南は、「唐朝文化と天平文化」の中でも金石と墨跡を比較する研究法を用いた。その中で墨跡「金剛場陀羅尼經」と金石文字「長谷寺銅板法華說相図」との比較を通して、両者は欧陽通の書風と一致しているとして次のように論じている。

但しこゝにどうしても支那本国と幾らか違ふ所は、支那の本国に行はれた事が日本に流行するまでに、少しづつ年代がおくれるといふことである……弘法大師がそれより後二三十年を経て入唐して専らそれを伝へたのであるが、然し天平宝字頃の写經には既に幾らか書風に変化も現はれてゐるから、其の流行が支那におくれる程度は極めて僅かなものであつたらしく思はれる。殊に驚くべきは、小川為次郎氏所蔵の宝林の金剛場陀羅尼經の如きは朱鳥元年といはれる丙戌の年の写經であるが、其の書法は全然欧陽通の風格である。是は長谷寺の千体佛の銘と同人同年の作と思はれるが、此時は欧陽通はまだ存命中で、通の有名な道因法師の碑は此歳より二十三年前の龍朔三年に書かれ、近時出土の高麗泉男生の墓誌は僅かに七年前の調露元年にかゝれて居り、通の死んだのは此の写經の年より五年後の則天の天授二年である。⁶⁾

つまり、湖南は天平時代の書法を考察する際に、墨跡の「金剛場陀羅尼經」と、それに近い年代の金石文字の「長谷寺銅板法華說相図」を比較した。湖南は両者の書風が欧陽通の影響を受けていると述べた上、傍証として新出土の欧陽通の書いた「泉男生墓誌」をあげた。金石学の研究は湖南の史学研究の一部として活用されていたことが窺える。

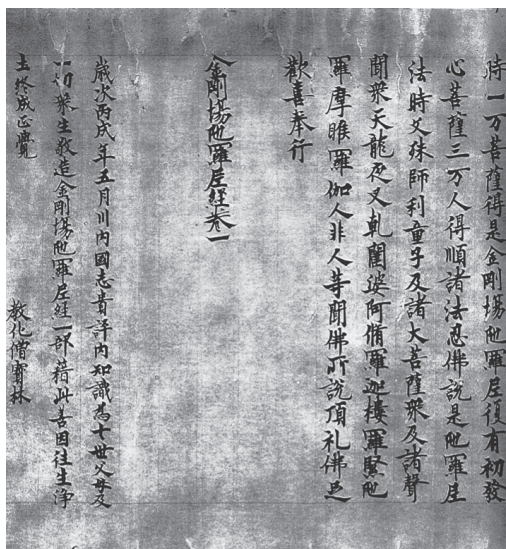


図2 金剛場陀羅尼經

湖南全集』第8巻、筑摩書房、1969年。

6) 内藤湖南「唐朝文化と天平文化」、大正14年(1925)12月「佛教美術」第五冊、『内藤湖南全集』第9巻、筑摩書房、1969年、296頁。

墨跡の「金剛場陀羅尼經」と金石文字の「長谷寺銅板法華說相図」を比較する例はこれだけでなく、「弘法大師の文藝」⁷⁾、「正倉院の書道」⁸⁾、「空海の書法」⁹⁾などの論文の中でもしばしば使われていた。また、このような墨跡と金石文字を比較する研究実例として、湖南は自分の「論書十二首」の中でも次のように書いている。

金剛場卷幾曾繙、朱鳥遺經甲子存。銘刻更傳千佛塔、小欧書体赫清原。

小川氏尚簡齋藏「金剛場陀羅尼經」、卷尾記「歲次丙戌年五月川内国志貴評内知識敬造」、書帶隸意、酷肖欧陽通。大和長谷寺藏有「法華說相図」銅板、世称千佛塔、銘文有「歲次降婁漆菟上旬」語、乃戌年七月、書法全與此經同、蓋皆清禦原朝朱鳥元年所制也。¹⁰⁾

湖南は文化史と書風の視点から「金剛場陀羅尼經」と「長谷寺銅板法華說相図」を研究し、その歴史価値を評価した。その後、「金剛場陀羅尼經」は1951年に、「長谷寺銅板法華說相図」は1963年にそれぞれ国宝に指定された。

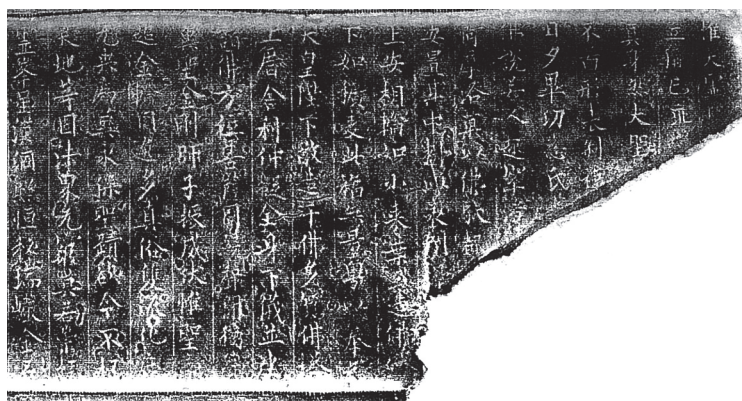


図3 長谷寺銅板法華說相図

湖南は幼少期から家庭教育の影響で漢学を学ぶ傍ら書法をも稽古し、青年時代には十分堪能できるようになった。湖南の書学研究は日中の金石文字と古来墨跡の比較を重視していると同時に、書法創作の面においても王羲之、智永の書法と日本古代金石文字の継承関係に注意している。すなわち、湖南は墨跡と金石文字の関係に関心を持ち、日本古来の金石文字の研究は筆法の復興にとって有効であると主張した。

7) 内藤湖南「弘法大師の文藝」、明治45年（1912）6月、『内藤湖南全集』第9巻、筑摩書房、1969年、83頁。

8) 内藤湖南「正倉院の書道」、昭和4年（1929）11月、『内藤湖南全集』第9巻、筑摩書房、1969年、300頁。

9) 内藤湖南「空海の書法」、昭和6年（1931）7月、『内藤湖南全集』第9巻、筑摩書房、1969年、303頁。

10) 内藤湖南「論書十二首」、「湖南詩存」、『内藤湖南全集』第14巻、筑摩書房、1970年、307頁。

二 金石学研究上の視野の変遷——筆法論から考証学へ——

湖南の金石学の研究業績は主に次の二つの面がある。一つは、金石文字の研究が伝統の古代筆法の復興にとって有益であると提唱したこと。もう一つは、中国金石学発展の歴史に注意し、いくつかの著作の中で論及したことである。本節は湖南の著書『燕山楚水』と『清朝史通論』の中で金石学に関連する論述を整理し、彼の金石学研究における視角の変遷について考察する。

湖南の金石学に関する論説の中では、1899年の訪中記『燕山楚水』の中にある「書法と金石」は最も早いものである。彼は古代の筆法が失伝し、古法を復興すべきだと提唱した。研究方法として、湖南は隋唐から受容した日本の「入木道」を系統的に学習したうえで、南都古寺に伝存する金石文字を合わせて比較研究すれば、晋唐古法を復興することができるとした。この論点の根拠は、日本に伝存する古代の金石文字が唐代のそれに近似すると見る点にあり、このような考察は湖南による金石文字に関する研究の端緒となった。

初回訪中の15年後、湖南は大正4年(1915)8月2日から6日まで京都帝国大学の夏季講演として「清朝史通論」を講じた。昭和19年(1944)3月、湖南の女婿鴛淵一と内藤乾吉の校訂により、同名の著書『清朝史通論』¹¹⁾が弘文堂から刊行された。その中で、第四講「経学」に「金石学」という一節があり、清朝金石学の発展状況について学者と著述を中心に述べた。これは湖南による金石学史研究の早期の成果である。

金石の学問について、湖南は「金といふのは銅器の銘文の研究、石は碑文の研究であります」と分かりやすく説明した。主要な金石研究家、そして金石学の各分野である銅器、古泉学、古印、封泥、甲骨文などに類別して、それぞれの研究状況を紹介し、さらに主な金石学の研究家をそれぞれ次のように紹介している。

まず、清朝金石学の概観として、その発端は顧炎武(1613~1682)が『金石文字記』を刊行したことに始まり、顧炎武は金石研究が経学と史学を研究する際に、書籍の誤りを正す効果があると提唱した。次に、翁方綱(1733~1818)は金石学問の基礎を作り、特に碑文に対して少しの誤りも見逃さずに熱心に研究した。その次の王昶(1725~1806)は、金石の文字を集めて『金石萃編』一百六十巻を編纂し、黄易(1744~1802)は「漢の時代の碑を一つ一つ遊歴して搨って歩くといふ熱心家」であった。清朝中期になると、各地方から金石研究の学者が多く出ており、金石学研究の発展を大きく促進した。例えば阮元(1764~1849)とその幕下にいた朱為弼(1770~1840)、趙魏(1746~1825)等は金文関連の資料を編纂した。そして張廷濟(1768~1848)、劉喜海(1793~1852)、張燕昌(1740~1814)、翟云升(1776~1858)などの金石家が現われ、その次の世代には陳介祺(1813~1884)、徐同栢(1775~1854)、吳式芬(1796~1856)などの金石家の研究によって、清朝の金石学は一層進歩したと湖南は評価している。

次に、金石学の各分野である銅器、古泉学、印学、封泥、甲骨文などの類別を分けてそれぞれの研究状況を紹介した。

金文と銅器の研究状況について、湖南は陳介祺、徐同栢、吳式芬などの金石家は金文の学問に対して

11) 内藤虎次郎『清朝史通論』、弘文堂、1944年、『内藤湖南全集』第8巻所収、筑摩書房、1969年。

研究実績を残しているが、銅器の鑑定に対してはまだ不十分であると述べている。乾隆帝時代に出た『西清古鑑』は、立派なものではあるが、真贋が混淆している。その真贋を見分けて、同時に銅器に書いた金文を正確に読み取ることができたのが陳介祺、徐同栢、呉式芬の時代のことであった。銅器と金文を熱心に研究した次の世代は、呉大澂（1835～1902）、劉心源（1848～1915）、端方（1861～1911）、羅振玉等である。この中で、端方は金石学者ではないが収蔵家として学者に多くの一次資料を提供したと書き加えている。

古泉学は古銭を研究する学問であり、金石学の別派として起こったもので、経学研究とはあまり関係がないが、史学研究にとって有益だと湖南は説明している。古泉学の分野において倪模（1750～1825）、初尚齡（1759～1841）、鮑康（1810～1881）、李佐賢（1807～1876）の4名の学者を挙げ、いずれも有名な良い著書を書いていると評価した。

印学において、古印の学問、鈇印（璽印）の学問、封泥の学問など相次いで起こったと紹介し、特に新興の封泥について用途や使い方などを説明しながら、最新の研究動向にも注意を払っている。

最後に新しく発見された甲骨文字に基づく学問を紹介している。当時の呼び方は「殷虚の亀版の学問」であり、「亀の甲若くは獣骨の上に彫つた文字であります。昔占をする時に、亀の甲若くは獣骨を使つた。是が金石のもので最も古いもので、今日から三千年の前のものが現はれて来て居る」と甲骨文字について説明している。湖南は明治三十五年（1902）に訪中の際、甲骨文の収蔵家である劉鶚（1857～1909）に会い、自ら甲骨文の実物を目睹したことを「支那上古の社会状態」に記載している¹²⁾。二十世紀初頭の日中交流はブームとなり、湖南の文人交流という視点に立って見れば、内藤湖南、長尾雨山（1864～1942）、山本竟山（1863～1934）など中国文化を熱心に研究し、のち京都を中心に活動し、中国に滞在し、あるいは遊学したグループと、楊守敬、羅振玉、劉鶚など日本の文人と密に交流している中国人のグループがある¹³⁾。陶徳民は劉鶚の『鉄雲蔵陶』の書名題字は羅振玉の推薦によって山本竟山が揮毫したものであると考証した。その後、内藤湖南は山本竟山、長尾雨山とともに京都大正癸丑蘭亭会、和漢法書展覧会、寿蘇会などの文人活動をともに企画し、書論や金石学に対して共通の認識を持っていたと考えられる¹⁴⁾。

湖南は羅振玉と長年の交友関係を持ち、盛んに学术交流を持ったので、羅振玉による甲骨文字研究を熟知していた。羅振玉は一時古文字の刻されている亀甲獣骨を専売する特許権を持っていたようで、それに基づいて立派な著述をしていたと述べた。湖南は清朝の金石学史の発展状況を概観した上、「今日まだまだ支那の学問といふものは発達する余地が十分あるのであります」と結論づけた。

12) 内藤湖南「支那上古の社会状態」、大正6年（1917）1月25日大阪朝日新聞社講演、「朝日講演集」第二輯所収、『内藤湖南全集』第8巻、筑摩書房、1969年、8～10頁。神田喜一郎「内藤湖南先生と支那古代史」、同著『敦煌学五十年』、二玄社、1960年、82～83頁。

13) 陶徳民著『明治の漢学者と中国—安繹・天因・湖南の外交論策』、関西大学出版部、2007年、153頁。

14) 杉村邦彦「大正癸丑の蘭亭会とその歴史的意義—百周年を記念して—」、藪田貫・陶徳民編著『泊園書院と大正蘭亭会百周年』、関西大学出版部、2015年、247～277頁。石永峰「『竟山学古』考—山本書学の結晶—」、陶徳民、中谷伸生編著『山本竟山の書と学問—湖南・雨山・鉄斎・南岳との文人交流ネットワーク』、181～182頁、関西大学東西学術研究所発行、株式会社ユニウス、2019年6月、181～182頁。

1900年の「書法と金石」と1915年の「金石学」の二篇の記述資料を比較した場合、どのような進展があるかについて考察したい。

第一に、「書法と金石」は記者としての旅行記であるのに対して、「金石学」は京都帝国大学の文科大学における東洋史学第一講座の教授による講義である。

第二に、両者を執筆する背景が異なる。「書法と金石」は筆法論から出発し、当時日本に流行っていた六朝書法の思潮に対して批判的な口調を用いて、自身の中国での見聞、中国の文人学者との交流に基づき、日本に残っている古来の墨跡と金石文字を対照しながら研究すれば、晋唐筆法の真髄を見極めることができることを説いた。「金石学」は経学と史学を研究する視角から必要な学問として位置づけており、「書法と金石」に言及している金石文字とはまったく関係がないとは言えないが、研究視角は本質的に異なる。

第三に「書法と金石」は日本の金石文字を中国と比較研究しているのに対して、「金石学」は清朝の金石学史研究の脈絡を、研究者と著述を中心に系統的に整理したものである。また、金文と碑文のみならず、金石学の新しい研究動向として古泉学、印学、封泥、甲骨文などの各研究分野についても説明している。『清朝史通論』にある「金石学」の一節は、湖南自身の金石学に対する認識が書法、美学、そして筆法論から、経学史学、考証学へと本質的に進歩したと言えよう。

三 金石学史研究上の視野の拡大——「清朝金石学」から「歴代金石学」へ——

上述のように、湖南の金石学に関する研究は、新聞記者時代の筆法論から経学・史学、そして考証学という視角へ大きく変化を遂げた。その後、湖南は京都帝国大学の東洋史講座において、南朝から五代までを略述し、宋代から清代までの金石学の形成と発展について『支那史学史』の中で詳しく論述し、『清朝史通論』にある「金石学」の議論よりも、視野は一層拡大した。湖南による京都帝国大学での講義「支那史学史」は、三回にわたって行われた。第一回は大正3年（1914）、大正4年（1915）の両年度にわたったものであり、第二回は大正8年（1919）から大正10年（1921）の三年度にわたったものであり、第三回は大正14年（1925）のものである。『支那史学史』は湖南の長子内藤乾吉と門人の神田喜一郎が第二回と第三回の講義の底本に基づいて編集し、昭和24年に弘文堂から出版された¹⁵⁾。『支那史学史』は次の12章から成っている。

- 「一 史の起源」
- 「二 周代に於ける史官の発達」
- 「三 記録の起源」
- 「四 史書の淵源」
- 「五 史記」
- 「六 漢書」

15) 内藤乾吉「支那史学史・例言」、『内藤湖南全集』第11巻、筑摩書房、1969年、3頁。

- 「七 史記漢書以後の史書の発展」
- 「八 六朝末唐代に現はれた史学上の変化」
- 「九 宋代に於ける史学の進展」
- 「十 元代の史学」
- 「十一 明代の史学」
- 「十二 清朝の史学」

宋代以前及び宋代の金石学は第九章「宋代に於ける史学の進展」の第九節「金石学の発達」に、明代の金石学は第十一章「明代の史学」の第十一節「金石書」に、清朝の金石学は第十二章「清朝の史学」の第十七節「金石の学」にそれぞれまとめている。したがって、金石学に関する学説を各時代ごとに系統づけており、結果として中国金石学発展史の論述になっているのである。次に、宋代以前及び宋代の金石学、明代の金石学、清代の金石学を時代順に、『支那史学史』における金石学に関する論述の要点及び『清朝史通論』との異同について考察する。

1 宋代以前及び宋代の金石学

宋代以前に金石を資料として活用することはあまり多くないが、湖南は南朝から唐代までの著述を簡単に紹介した。南朝の梁の元帝蕭繹（508～555）が碑文を収集し、『碑英』一百二十巻を編輯した。これは『四庫全書総目提要』が記載しており、金石学資料の最古のものである。北魏の酈道元（？～527）が著した『水経注』は北魏以前の多くの金石文献を引用している。北齊の顔之推（531～約597）著『顔氏家訓』の「書證篇」は資料を考証する際に金石文を使用した。唐代の『文館詞林』も多くの碑文を採録しており、北朝の文書や『隋書』などを校訂する効果がある。唐代の魏徵（580～643）などが編輯した『隋書』経籍志は「碑集は総集の中に入れ、石経は文字の学として小学の部に入れている」と湖南は説明している。

宋代の金石学に対して、湖南は「金石研究は正確に学術的となり」、学問として発達してきたと総評をしている。

まず北宋の金石学に関する専門書について、もっぱら史料として使用し始めたのは欧陽修（1007～1072）であるとする。欧陽修は金石文を千巻収集して自らの考証を跋文として附して四百篇余りを集め、宋の嘉祐八年（1063）に『集古録跋尾』十巻を撰した。彼の末子欧陽棐（1047～1113）がそれに基づいて熙寧二年（1069）に『集古録目』十巻を編輯した。次に趙明誠（1081～1129）は妻の李清照（1084～1153）とともに金石二千巻を集め、『金石録』三十巻を著した。湖南は欧陽修と趙明誠の著書は「金石を考証した専門の書の最初のものである」と評価した。また、金文に密接に関係する書籍として考古図や博古図などがあるとして、呂大臨（1042～1090）の著した『考古図』は文字と図を双方収録し、発掘地や所蔵者名も明記し、考証を加えたものとして評価した。宋代の大観年間（1107～1110）に、徽宗（1082～1135）の勅命により宣和内府に集めた先秦の各時代を中心とする古銅器をまとめて、『宣和博古図』が刊行された。その中で古銅器の文と図を考証してはいるが、「むやみに古書を古物に附会したので信じ難いと云はれる。とにかくその考証が『考古図』より劣っていることは明かである」と湖南は批判した。

王厚之（1131～1204）は秦檜の子、秦嬉（1117～1161）が所蔵した器物によって『王復書齋鐘鼎欵識』を刊行した。王球（生没年不詳）は『嘯堂集古録』を著したが、その中の古物は真偽不明のため、参考価値も疑われると湖南が書き加えている。これに対して湖南は黄伯思（1079～1118）の『東觀餘論』、董道（生没年不詳）の『広川書跋』に対して議論が正確でよいと評価した。両者とも題跋を集めたものであるが、内容的には金石、碑文、書法、金文などに対して考古学的に研究しているからである。

次に、南宋の金文、古文字の研究と発展状況を紹介している。薛尚功（生没年不詳）は『歴代鐘鼎彝器欵識法帖』二十巻を著し、『宣和博古図』にある誤りを一部考証した上訂正した。また、翟耆年（生没年不詳）の『籀史』は研究書の解題を研究しており、洪適（1117～1184）の『隸釈』と『隸統』は漢碑を研究している。一方、金石研究は悪い方向へ進んだものもあり、例として薛季宜（生没年不詳）が蝌蚪文で書いた『書古文訓』を指摘した。金石の実物研究以外に、聶宗義（生没年不詳）『三礼図』、鄭樵『金石略』をも紹介している。また、金石学の中で古銭学を紹介し、最古の著作に洪遵（1120～1174）の『泉志』があり、銭幣の分類に関して古銭研究の例を作ったと評価した。

2 元代と明代の金石学

金石学は宋代において一時的に盛んになったが、元明時代になると衰えた。元代の金石学は宋代と比べてあまり進歩しなかったが、朱徳潤の『古玉図』をあげ、『考古図』、『博古図』に『古玉図』を加えて「三古図」と称されている。

明代の金石学研究について、湖南は「最も金石学者の貧弱であった時代」であり、まだ学問的なものではないと概観している。この時代の金石学研究の学者と著作を紹介した際に、まず、「楊慎を見逃すことができない」と述べたが、具体的な著書をあげていない。ところで内藤文庫は清代の葛元煦が編輯した『学古齋金石叢』に楊慎（1488～1559）の『金石古文』を所蔵している。都穆（1458～1525）の『金薤琳琅』は洪適の『隸釈』と『隸統』の研究方法をまねて、碑文を抄録した後自分の考証を述べており、明代において最も完備した金石の著述と評価した。趙崑（1564～1618）の『石墨鐫華』は陝西地方にある石碑の書法に対して自分の意見を記したが、碑文を収録しておらず、歴史的な考証をする論述ではないとした。一方、女真文字や八思巴文字など珍しい碑文を著録しており、金石学史上最初のものであると湖南が指摘した。このほか、地方の学者の著述として、郭宗昌（約1570～1652）の『金石史』をあげている。

3 清朝の金石学

清朝の金石学は中国歴代において最も盛んになった時代であり、湖南は乾隆時代前後を境として、金石学における宋明以来の学風が変化したことを指摘した。これについては、伝統の金石文研究と新しく派生した分科との二部に分けて見ていこう。

湖南は伝統的金石文研究において、『清朝史通論』にある「金石学」と同じように、清初から乾隆期までの金石学研究は石刻文字の研究が多く、それは顧炎武に始まるとする。その後、代表的な学者翁方綱、王昶、阮元、呉式芬などのほか、銭大昕（1728～1804）、趙之謙（1829～1884）、羅振玉などによる金石学に関する著書なども詳しく紹介した。

清朝の金文研究は、錢大昕の学風の影響を受け、それまでの時代より著しく進歩した。代表作として阮元の『積古齋鐘鼎彝器款識』があり、阮元の門下である朱為弼は金文を読み解き、校正、編輯などに力を発揮した。阮元の金文研究と比べて、張燕昌の『金石契』は「半ば愛玩的、半ば学問的」で、馮雲鵬（生没年不詳）の『金石索』は「学問的に傾いているが、著者の無識のため、編輯が雑で、学問的材料として洗煉されていない」と湖南はそれぞれの金文著述を学術的視点から評価し、あるいは批判した。

新しい出土資料が発見されるとともに金石学の範囲が拡大し、伝統の金石文より新たに形成された金石学の分科が注目されるようになった。湖南は金石学の分科としての古泉、印学（古印、印譜、封泥）、墓誌、瓦当、甲骨文字、木簡の研究状況をもそれぞれ紹介した。

まず古泉の学問について、『西清古鑑』とともに欽定の『錢録』十六巻があるが、学術的価値がないと湖南は批判した。道光期から古泉学が進歩し始め、盛大士（1771～1836）の『泉史』、倪模の『古今錢略』があげられ、特に馬昂（？～1851）の『貨布文字考』が「最もよい」と紹介した。このほか、戴熙（1801～1860）の『古泉叢話』、劉喜海の『論泉絶句』、初尚齡の『吉金所見録』など豊富な研究が残されている。

次に印鉢の学問について、汪啓淑（1728～1799）は印を模刻して『飛鴻堂印譜』を編輯したが、愛玩的なものである。呉雲（1811～1883）は原印そのままを押すという新しい研究方法で『二百蘭亭齋古印考蔵』を編輯した。古印は小学研究の材料として用いられ、官制、地理の研究にも役立つ。呉大澂は古印を使って姓氏を研究し始めた。

封泥は新しい出土史料として湖南が注意を払った分野であり、その研究として呉式芬・陳介祺の著『封泥考略』を紹介した。このほか、専著ではないが、劉喜海の『金石苑』は当時の新しい写真技術を使って原物に近いものを再現した。

墓誌の出土と研究の背景について、湖南はそれまで石碑のほとんどが発見され、研究も蓄積されてきた中で、河南省の鉄道工事によって北魏から唐宋までの墓誌が多く発掘されたと説明した。最初に墓誌を整理研究したのは羅振玉の『芒洛冢墓遺文』である。墓誌は史料としても、書法としても注意すべき資料であると湖南が指摘した。

当時盛んになった瓦当と甃の研究について、乾隆の時に程敦（生没年不詳）の『秦漢瓦当文字』、その後陸心源（1838～1894）の『千甃亭古磚函积』、『千甃亭磚録』を紹介した。

次に、清末の二大発見の甲骨文と木簡について紹介した。甲骨文を最初に発見し、収集したのは王懿榮（1845～1900）であり、その後劉鶚の手に入って、のち『鉄雲蔵龜』を刊行した。湖南は友人の羅振玉が亀板獸骨を収集し、それに基づいて多くの著書を出版したことを紹介している。湖南は書名をあげていないが、羅振玉の研究成果である『殷商貞卜文字考』（1910）、『殷虚書契考积』（1914）、『増訂殷虚書契考积』（1927）は当然知っているはずである。なぜなら、羅振玉の『殷虚書契考积』が成書した1914年は京都に住んでおり、湖南と多くの学術交流を行っていたからである。また、羅振玉著の『殷虚書契前編』八巻のために、湖南は「殷虚書契」の四字を題簽した。「殷虚書契」四字の次のページに「集古遺文第一」という題字も湖南の墨跡である。もう一つの大発見についても羅振玉と深く関わっており、それは中国の西域で発見された簡牘（木簡、竹簡）である。羅振玉は王国維（1877～1927）とともにスタ

イン (Sir Marc Aurel Stein, 1862~1943) とシャバンヌ (Édouard Chavannes, 1865~1918) の資料と研究に基づいて有名な『流沙墜簡』を京都で出版した。

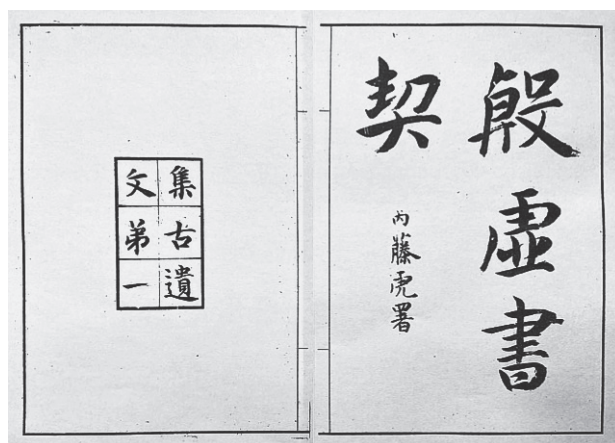


図4 内藤湖南題簽「殷虚書契」

西北地理の研究が発展するとともに、中国周辺の国々や地域における金石資料の収集と研究範囲が拡大した。劉喜海は朝鮮及び日本の古碑を研究し、『海東金石苑』八巻を著した。盛昱は古代高麗の「好太王碑」の拓本を取ってもらい、李文田 (1834~1895)、沈曾植 (1850~1922) などは西域蒙古などの古碑を研究し始めた。曹廷杰 (1850~1926) は東北三省の地理を研究していた際に、元代の金石史料も発見した。羅振玉は西藏及び中央アジアの石碑を収集し、『西陲石刻録』を出版した。湖南は日本の金石資料について傅雲龍 (1840~1901) の『日本金石誌』があるとした¹⁶⁾。

最後に、湖南は金石総録の著述状況を紹介した。金石学史において最初の総録は道光の頃の李遇孫 (生没年不詳) が著した『金石学録』であり、その後に陸心源は続編として『金石学録補』、褚德彝 (1871~1942) は『金石学録続補』を作った。金石学の総論として葉昌熾 (1849~1917) は石碑を時代、地方、碑の体裁、碑の文体、書法などの項目を分けて『語石』をまとめ、湖南は「碑に関する書として最もよいものである」と評価した。金文の総録類の著作について、呉式芬の『攷古録金文』、呉大澂『憲齋集古録』がある。

漢字の源流と形成に関する研究は呉大澂の『字説』と孫詒讓 (1848~1908) の『名原』があり、特にその後の羅振玉が著した『殷虚書契考釈』はそれらを大成したものとして評価した。また、羅振玉の『桶廬日札』は金石学の総論にあたる書籍として有用である。補足として陳介祺の『伝古別録』は拓本の作

16) 石田肇「傅雲龍の『日本金石誌』と陳矩」、書学書道史学会編『国際書学研究/2000：第4回国際書学研究大会記念論文集』、萱原書房、2000年。杉村邦彦「東アジアにおける金石の交流—多胡碑の朝鮮・中国への流伝とその歴史的背景—」、書論編集室『書論』第37号、2011年。石田肇、杉村邦彦の研究によると、傅雲龍は光緒13年 (明治20年、1887年) の旧暦9月29日から翌年の旧暦4月18日まで日本に滞在し、その間に得た見聞と資料に基づいて『遊歴日本図経』をまとめており、その中で「日本金石誌」が収録されている。しかし、傅雲龍の「日本金石誌」は第四代清国駐日公使黎庶昌の随員として日本に滞在した陳矩 (1850~1939) が編集した『日本金石誌』4巻という成果をそのまま利用したようである。

り方、金石の保存法に関する記述があると紹介した。湖南は中国金石学の不足として、西域、蒙古、突厥、回鶻、西藏、西夏、女真、満洲、契丹、八思巴字、朝鮮吏吐（吏読）などの文字に対して知識の不備があると指摘した。

上述のように、湖南は、その著『支那史学史』において「金石学の発達」、「金石書」、「金石の学」の三節にわたり、主に宋代、明代、清代の金石学の形成と発展について考察した。『支那史学史』の金石学に関する論説が『清朝史通論』にある「金石学」と比べて学問的に進歩した点を次のようにまとめることができる。

第一に、『清朝史通論』にある「金石学」の一節は「近代」、つまり清朝の金石学の発展状況を述べるに留まるのに対して、『支那史学史』は中国金石学の歴史を宋代、明代、清代の各章において紹介した。しかしそれにとどまらず、湖南は中国最古の金石学資料の祖である南朝の梁の元帝蕭繹が撰した『碑英』一百二十巻をはじめ、隋唐、五代、元代など歴代の金石学の形成と発展について考察した。湖南は中国金石学発展史上の著作を単に列挙するだけではなく、石刻、金文、博古図、金石書目、金石字典などを系統的に整理している。収蔵家や図書館に隠れて一般の人たちが知らないことを紹介し、隠れているものの中から金石学の学問の価値を見出すことは内藤史学の特色とも言えよう¹⁷⁾。本章は『清朝史通論』、『支那史学史』の考察を通して、湖南の金石学史研究の形成過程を明らかにした。彼の金石学史研究は「中国金石学発展史」に相当する論述であるといっても過言ではない。

第二に、湖南は金石学の発展史を見ると、特にその学者が金石を史料として研究しているかどうかを特に重要視した。なぜなら、宋明までの金石学は一部の貴族や学者が「尚古」の風潮の中で収蔵、愛玩、書法鑑賞を目的とするものが多かったからである。

第三に、湖南は中国金石学史の史料を分析する際に、進歩的史観で当時の金石学を考察したことも重要である。例えば、翁方綱が著した『兩漢金石記』は宋代の洪適の『隸釈』と『隸統』より更に一步を進めた。また、清朝の金石学がそれまでより進歩したのは錢大昕の研究であると指摘した。錢大昕から金石を史料として研究し始め、その後の畢沅、阮元及び門下に大きな影響を与えた。さらに、金文の研究において、明代までより進んだ研究者は阮元、劉喜海の次に、陳介祺、潘祖蔭、吳式芬、吳大澂がいると湖南は注意している。

第四に、湖南は清朝までの金石学を考察する際に、主体研究である石刻文字、金文を系統的に整理したのみならず、古泉、印学（古印、印譜、封泥）、墓誌、瓦当、甲骨文字、木簡などの新発見資料によって形成された金石学の分科に関する研究も紹介し、当時中国における最新の研究動向を詳しく分析した。さらに、金石地理学や金石総目まで紹介しており、中国金石学史について発展史的な考え方に基づいてその学問体系を考察した。

総じて中国歴代金石学に関して時代の範囲、金石学の分科内容などから見れば、『清朝史通論』にある「金石学」から『支那史学史』にある金石学に関する論説まで拡大しており、要するに清朝の金石学から歴代の金石学へとより完備したものになったのである。しかし、『清朝史通論』と『支那史学史』は湖南が異なる講義で中国の金石学史研究を話した内容であり、湖南の金石学史研究を考察する際に両方とも

17) 大庭脩「蔵書を通じてみた内藤湖南の学問」、『湖南』第17号、内藤湖南先生顕正会、1997年、16頁。

不可欠な資料となるのは、言うまでもない。

最後に一言を付け加えておきたいことがある。それは『清朝史通論』から『支那史学史』に至るまでの関連論説は、湖南の金石学に対する研究視野が拡大されただけでなく、近代日中の金石学史研究においても先覚者的な存在と言える。朱志先と張霞は湖南の『支那史学史』について、「中国の傑出した史学家の学問の影響を受け、内藤氏の『支那史学史』は中国学者の研究成果に対する学習と批判の両面が現われている」と評価した¹⁸⁾。この評価は湖南の金石学研究の部分に対しても当てはまっており、中国の金石学史研究の成果の流れを述べるだけでなく、その優劣を評論しながら整理している。金石学発展史の研究について、湖南の『支那史学史』は馬衡（1881～1955）が1924年¹⁹⁾に著した『中国金石学概要』²⁰⁾の論述に非常に近い可能性がある²¹⁾。『中国金石学概要』は中国近代金石学の基礎を定めた論著であるが、「前人著録金石之書籍及其考証之得失」の一章が失われてしまった。上述したように、湖南の『支那史学史』は京都帝国大学で講義をしたのは1914～1915年、1919～1921年、1925年の三回であり、馬衡が出版した『中国金石学概要』の1924年にはほぼ同時期になる。そのため、馬衡の『中国金石学概要』に欠けた「前人著録金石之書籍及其考証之得失」部分に対して湖南の『支那史学史』の中での金石学に関する論説は一定の参考価値があると考えられる。

四 内藤湖南の金石学史研究における京都東洋学派への影響

前節において、『支那史学史』中の金石学史に関する論説を分析し、湖南の中国金石学史の概論と発展史を把握することができた。湖南は桑原隲蔵、狩野直喜らとともに京都東洋学派を創始し、東洋史研究も含めて湖南の金石学研究は草創期的なものであり、その特徴、注意すべき点、研究方向などの重要事項を述べた。湖南の金石学学説は京都東洋学派の金石学研究に大きな影響を与えた。例えば、西域の西夏石刻や文字を研究した石濱純太郎（1888～1968）、青銅器や古鏡を研究した梅原末治（1893～1983）、馬衡著『中国金石学概要』の「石刻」部分を分担し訳注した嗣子の内藤乾吉（1899～1978）・貝塚茂樹（1904～1987）・水野清一（1905～1971）・日比野丈夫（1914～2007）²²⁾、また湖南が注意した新出土資料の

18) 朱志先・張霞「人類第一部『中国史学史』一讀内藤湖南『中国史学史』有感」、『文化学刊』、2011年3月第2期、180頁。

19) 朱天曙「『中国金石学概要』與馬衡先生的學術貢獻」、『社會科学論壇』2010年第2期、89頁。

20) 馬衡『凡将齋金石叢稿』目録を参照、中華書局、1977年版。

21) 馬衡『中国金石学概要』の初版は1924年に出版されており、常に中国の学界の研究動向を注目する湖南は『中国金石学概要』を知っている可能性もある。湖南の嗣子内藤乾吉が訳注した『中国金石学概要』の「石刻」の一章は関西大学内藤文庫に所蔵されている。訳注を参加している他のメンバーは水野清一、小川茂樹、日比野丈夫などの学者もいる。「石刻」の一章は1938年前後七回にわたって『東洋史研究』第三巻から第五巻まで発表されている。

22) 『中国金石学概要・石刻』の訳注は『東洋史研究』（東洋史研究会編、彙文堂書店）に掲載されている。「石刻（一）」水野清一訳注、『東洋史研究』第3巻第1号、42～57頁、1937年10月。「石刻（二）」小川茂樹訳注、『東洋史研究』第3巻第2号、29～45頁、1937年12月。「石刻（三）」塚本善隆訳注、『東洋史研究』第3巻第4号、88～96頁、1938年4月。「石刻（四）」内藤乾吉訳注、『東洋史研究』第3巻第6号、69～79頁、1938年9月。「石刻（五）」日比野丈夫訳注、『東洋史研究』第4巻第2号、63～71頁、1938年12月。「石刻（六）」水野清一訳・小川茂樹注、『東洋史研究』

甲骨文研究や金文研究に力を注いだ貝塚茂樹などはすべて湖南の金石学研究の学問を受け継いでいる。本節では一例を挙げて貝塚茂樹の「清朝の金石学」と湖南の学説の比較を通して、内藤湖南の金石学史研究の京都東洋学派への影響について考察する。

貝塚茂樹は大正14年（1925）4月に京都帝国大学文学部史学科に入学し、湖南が翌年8月に退官するまで一年あまり「支那近世史」、「支那中古の文化」の授業を受けた。その後、貝塚茂樹は湖南が晩年に隠棲した京都府相楽郡瓶原村の恭仁山荘をしばしば訪ねた。貝塚茂樹は京都帝国大学で学生生活を送った後、東方文化学院京都研究所研究員を経て、同研究所教授となり、甲骨文研究や金文研究を含む東洋史研究を大きな業績を残した。著作は『貝塚茂樹著作集』全十巻にまとめられている。

貝塚茂樹の「清朝の金石学」²³⁾は『貝塚茂樹著作集』第二巻に収録されており、清初の顧炎武から清末の陸心源までの学者及び著作を系統的に論じた。「清朝の金石学」の研究方法は基本的に湖南から引き継ぐものであり、伝統の石刻文字、金文、新資料に基づく三分科という構成になっている。湖南の『支那史学史』の中で金石学に関する論説は、貝塚茂樹の清朝の金石学の「南北派」説や金石図録の系統論などにも影響を与えていると考えられる。湖南の金石学論説の内容と一致する部分と進化した部分に分けて次のように整理することができる。

1 湖南の金石学論述と一致している部分

第一に、中国金石学発展の隆替及び研究不足という問題点の指摘において湖南と同じ立場に立つ。つまり、貝塚茂樹は「宋代において隆盛を極めながら、中ごろ元・明時代に衰微した金石学は、清朝に至って復興し、宋代をはるかに凌ぐ空前の盛観を呈した……元・明二代においても、古代の銅器銘や漢・唐の古石刻の典雅な文章と絶妙な筆蹟を愛玩する文人墨客は跡を絶たなかったが、ただこれらの鑑賞家は古金刻石を美術品として欣賞したに止まっていた」とした。

第二に、金石文字に対する考証、すなわち「史書の欠を補い誤りを正す」清初の顧炎武の学風と歴史的功績を宋代の欧陽修、趙明誠と並べて重視することである。

第三に、金文研究の重要資料として、清朝の『西清古鑑』は石刻学から金文学の領域に拡大したが、「考釈は宋代の『博古図録』や薛尚功の『歴代鐘鼎彝器款識法帖』の通説からほとんど出るところはなかった」としている。湖南は『西清古鑑』甲乙二編や『寧寿鑑古』を紹介した際に、「この時代はまだ古物愛玩を主として、真の研究から出たものではなく、その鑑識も進まなかった」と指摘しており、貝塚茂樹も湖南のこの観点とほぼ同じである。

最後に、金文学の隆盛を推進した阮元が薛尚功の『歴代鐘鼎彝器款識法帖』、王厚之の『王復書齋鐘鼎款識』を復刻したことを紹介したうえ、門下である朱為弼の協力によって『積古齋鐘鼎彝器款識』を著した論述は、湖南の説を踏襲しながら、阮元の経学上の著作『十三経注疏』や朱為弼の著『茶馨館集』をも紹介している。

第5巻第1号、60～66頁、1939年10月。「石刻（七）」水野清一訳・小川茂樹注、『東洋史研究』第5巻第2号、63～70頁、1940年1月。

23) 貝塚茂樹「清朝の金石学」、『貝塚茂樹著作集』第2巻、中央公論社、1977年。

2 湖南の金石学論述を基として一步を進めた部分

第一に、貝塚茂樹は青銅器や金文を研究する際に、器形やそれと関連する図録にも注意している。例えば、錢坫（1744～1806）の『十六長樂堂古器款識』を宋の呂大臨の『考古図』や『博古図録』を真似て、器形図を墨本とともに収録し、銅器の用途を研究し、宋代以来敦と呼ばれてきた器を簋と改称したとし、青銅器の考古学的・器形学的研究に貢献したと評価している。また、貝塚茂樹は曹載奎（1782～1852）著の『懷米山房吉金図』の特徴として、器形と銘文とともに精密に模刻し、原器の高さを測定して明記しており、『西清古鑑』を凌駕したとしている。

第二に、貝塚茂樹は清朝金石学の図録体例を宋の『博古図録』と薛尚功の『歴代鐘鼎彝器款識法帖』の二大系統に分類した。具体的には、『博古図録』は器形と銘文を併載しており、この系統に劉喜海の『長安獲古編』二卷、吳雲の『兩壘軒彝器図釈』十二卷、潘祖蔭（1830～1890）の『攀古樓彝器款識』二冊、吳大澂『恒軒所見所藏吉金録』一卷、端方『陶齋吉金録』八卷・『統録』二卷などがある。一方、薛尚功の『歴代鐘鼎彝器款識法帖』は銘文と考釈のみを公刊しており、この系統には、吳榮光（1773～1843）の『筠清館金文』五卷、徐同柏の『從古堂款識学』十六卷、劉心源の『奇觚室吉金文述』二十卷、孫詒讓の『古籀拾遺』三卷などがあるとした。

第三に、貝塚茂樹は清朝金石学の最盛期（同治から宣統まで、1862～1910）に、南北二学派を大別できると主張した。北派は山東に在任した経歴のある畢沅・阮元もしくは山東出身の陳介祺を代表する研究者と指すとしている。畢沅・阮元共著の『山左金石記』があり、金石蒐集の趣味を鼓吹し、多くの金石学者が輩出した。陳介祺は銅器の収蔵が豊富で、鑑定も精しく、貝塚茂樹は新出金石の真偽を論じる『簠齋尺牘』、銅器拓本の秘法を紹介する『伝古別録』を紹介した。一方、南派は江蘇、浙江、江西などの江南地方の金石学者を指し、『説文』などの文字学、訓詁学に基づいてその学問の特色が形成されたとしており、代表者として吳大澂と孫詒讓をあげている。湖南は『支那史学史』の中で吳大澂と孫詒讓及びその著書を紹介したが、貝塚茂樹の方は吳大澂の『説文古籀補』に注目して考察した。『説文古籀補』は新しい字典として確実な金文に基づく新解釈を述べ、解釈できない文字を巻末に附録するという慎重な態度を称賛した。後世の金文字典に与えた影響として、民国の容庚（1894～1983）が著した『金文編』十八卷は吳大澂の研究方法を引き継いだものであると指摘した。さらに、貝塚茂樹は、吳大澂と孫詒讓の金文解読法はその後に出土した甲骨文字にも応用されたと紹介した。

上述のように、貝塚茂樹は湖南の金石学発展史の流れを受け継ぎ、そして指摘したような研究不十分な分野の金文研究や、甲骨文字研究を中心において力を注いでおり、独自の研究成果を達成することができたのである。このようにして湖南の金石学史研究は後につづく京都東洋学の研究者に受け継がれ、新しい研究成果を収めるに至ったのである。

おわりに

内藤湖南の金石学に対する趣味や関心は、経史学や書法を含む幼少期の漢学教育によって培われた。三十代の新聞記者時代において日本の書壇における碑学隆盛の思潮に対して、書法と金石の関係を論じ、古来中国から流伝してきた墨跡と古代日本の金石文字の比較研究を通して、古代の筆法を復興すべきこ

とを主張した。湖南の論述の中で列挙した古代中国と日本の金石文字から彼は書道史研究において金石文字の書風や特徴をすでに把握していることが窺える。湖南の「書法と金石」論はこのように形成し、京都帝国大学赴任後の金石学史研究に対して結果的に先行研究になったと言えよう。

京都帝国大学に赴任後、湖南は文科大学の東洋史第一講座を担当し、大正4年（1915）8月に京都帝国大学で「清朝史通論」と題して5日間にわたって講演をした。この講演の中で、湖南は清朝の「経学」を講じた際に、清朝の金石学の発展状況にも触れていた。これは湖南の金石学に対する早期の学術的成果であり、15年前に湖南が著した『燕山楚水』の中で論じた「書法と金石」と比べて大きな進展を見せた。

さらに、湖南は大正3年（1914）から大正14年（1925）まで京都帝国大学で『支那史学史』を三回にわたって講義を担当した。『支那史学史』の中で「金石学の発達」、「金石書」、「金石の学」の三節において主に宋代、明代、清代の金石学の歴史を講じた。また、中国最古の金石学資料の祖である南朝の梁の元帝蕭繹が撰した『碑英』一百二十巻をはじめ、隋唐、五代、元代など歴代を含む学者と著作を系統的に取り上げ、中国における金石学の形成と発展について考察し、同時に古泉、印学（古印、印譜、封泥）、墓誌、瓦当、甲骨文字、木簡などの新発見の資料によって形成された金石学の新しい研究動向にも注意して紹介した。したがって、『支那史学史』にある金石学に関する論説は『清朝史通論』の「金石学」よりも、湖南の研究視野が拡大することによって獲得したものであり、「中国金石学発展史」成果として読むべきであろう。

最後に、湖南は京都東洋学派の創始者の一人として、東洋史学全体を含めてその金石学研究も後学に大きな影響を与えた。一例として湖南の門人である貝塚茂樹の「清朝の金石学」と湖南の学説の比較を通して、湖南の金石学論説の内容と一致する部分と進化した部分を分けて整理した上で考察を試みたのである。

総じて、湖南の金石学は漢学、東洋史の一部として若年から興味を持ち、京都帝国大学赴任後にも学問の一部として研究を続けてきた。金石文字と墨跡の比較研究は、伝統的な筆法の復興にとって有効であるとなる論説、『清朝史通論』の中で清朝の金石学に関する概説的な研究、『支那史学史』における中国最古の金石学資料の梁の元帝蕭繹が撰した『碑英』一百二十巻から清末までの金石学発展史の論述は、湖南の金石学の形成、変遷、進化が現れている。湖南の金石学史研究は湖南の学問の一部であると同時に、京都東洋学派に対して深遠な影響を与えたのである。戦後に出版された平凡社の『書道全集』の中国書道史などの部分は、監修神田喜一郎氏を始めとして、湖南の文化史、書学、金石学の流れを汲む京都学派の研究者によって執筆され、その影響は今日にも及んでいる。

